

## 21.繋がりを求める子ども食堂

山手一輝

はじめに

子ども食堂が予示・啓示する新しい社会のあり方、かたちとして、私が考えるのは「一定の距離を保たれた繋がり」というものが求められていく社会である。

子ども食堂に対して、確かに貧困な事情を抱えた親子が来るケースはゼロではなく子ども食堂としても、1番の目的を貧困家庭の子どもにお腹いっぱい食べて欲しいという思いで始めている人達も多いため、子ども食堂において、「貧困」というキーワードは極めて重要なものとなっているようにも思える。しかし、私が行った子ども食堂先々で聞く話の中で、本当にお金が無くて困っているという人達がなかなか来てくれないという事について悩んでいるところが多く、実際に自分が参加者の事を見てみた感じも、生活に困っているような人があまりみられないように思えた。

これまでの活動

自分が今まで参加してきた子ども食堂について触れておくと、ひまわり邸、西福寺、東山ぐうぐう食堂の三つがあり、一つずつ活動を振り返ってみようと思う。

2年に上がってから最初にお邪魔したひまわり邸は、6月の終わりの方にお邪魔させてもらった。大学生ボランティアは中京生5人の他に、2人ほど来ていた。老人ホームで行うものだったので、子どもだけではなく、老人の方も何名かいて、自分は老人の方が座るスペースを担当した。が、結局老人の方は一人しか座らず、施設で働いている方と、その娘さんが席に着いた。がんばって会話をしてみようと試みたが、なかなか会話が弾まず、何か質問しては途切れ、質問しては途切れと、なかなか上手くいかなかった。

食事の時には職員さんが2人ほど増えて、その方たちが中心になって話をしてくれていた。

その日のご飯はから揚げで、子どもが好むようなものに、バランスの考えられたスープやサラダがついてきていてとても美味しかった。

食事が終わった子は遊び始めていて、子どもの座るスペースを担当していた安松君が大人気で、特に男の子を中心に一緒に遊んでいた。

食事が終わった後にレクリエーションが用意されていた。大きな布に穴が開いており、布の上にボールをいくつも転がし、何人かで布の端を持って上げたり下げたりして布の穴の中に一番早く全てのボール入れたチームが勝つというゲームだった。自分は男の子がたくさんいるチームに入った。勝負事ということもあってか、みんなやる気満々で一生懸命取り組んでいた。

最後に、この食堂の毎回の恒例になっていたらしく、人間っていいなをみんなで歌い、ボランティア組は片付けをして解散した。

次にお邪魔したのは西福寺で、大学生ボランティアも多い人数おり、更に高校生ボランティアの方もたくさんきていた。この子ども食堂はお寺でやっており、食べに来る人も100人を超える人数で、どういう風に回しているのかすごく不思議であった。

実際ボランティアに参加してみると、自分が今まで参加してきた子ども食堂とは大きく違っていて、それぞれボランティアの人達の役割を大きく分けてその仕事に専念していた。

自分は最初の方は本堂の方で遊んでいる子どもの様子を見ていて、交代の時間になったら食事出来るフロアの片付けなどの仕事を任されていたが、人数が足りなくなった盛り付けと配膳の仕事に回った。

食事の時、他の食堂だと一斉にみんなで食べるが、ここでは番号札を配って、席が空いたら通すというような普通のレストランなどで採用される方法を取っていてとてもビックリした。

子どもとの触れ合いはなかなか上手く行かず、そこまで会話をしっかり出来ないまま交代の時間となってしまった。いつまで経っても初対面の子相手にどう話しかければいいかわからず、そのままうやむやで終わってしまう。

食事の盛り付けや配膳に関しては指示された事をきっちりこなしていけば良いので対して苦でもなく、ある程度こなせた。いつもはもう少し人数が少なかったようだが、今回はボランティアの人数が多かったようでどこかが人数不足になる事なく仕事を進めて行くことが出来たようだった。

食事に関しては、今回はちらし寿司を用意してくれていて、普通のちらし寿司と違う点としてツナ缶を入れていたらしく、それが子ども達に好評だったらしい。普段酢飯を食べることが無い子がおかわりするほどだったそうだ。揚げ物が無かった分掃除がとても楽で、洗い物の苦勞がほぼなかったり、温かくなくては美味しく無いようなものが少なかったりするおかげで、盛り付けのストックが出来、注文が来たらすぐに提供できるからよう準備も出来て、回転が早かった。

最後にお邪魔したのが東山ぐうぐう食堂で、この食堂は集会場を使用していて、ホールのような場所が会場となっており、給湯室を調理場として使用していた。

私は会場側の手伝いを基本として行っていた。

最初に、ホールの倉庫のようなところから机を出して並べたり、畳や莫菴を引いて座れるスペースを用意したりした。設営が終わると今度は外に出す用の看板に、食堂の名前や今日のメニューなどを書いて外から来る人に分かりやすいよう準備をした。

開始時刻に近づくと集会場から近辺の地域に向けて放送を流せるようで、子ども達が担当してぐうぐう食堂の宣伝を行い、しばらくすると沢山の人が来だした。

ある程度子ども達が集まったところで、手品を披露してくれる人がいて、マジックショーが開かれた。それが終わると夜ご飯を食べ始めるようになった。

本日のメニューはごはん、豚汁、野菜のナムル、ふかし芋で、特に豚汁は具材たっぷり、その具材に味がしっかり染み込んでいてとても美味しかった。その日は地域の新聞記者のような人が来ていて、ご飯を完食した子ども達の写真を撮影していた

ご飯が食べ終わるとみんなトランプやウノ、オセロや将棋などであそんでいた。

片付けはホール側の片付けのみの手伝いで良く、調理場側は他の人が担当してくれた。

どの食堂も、子ども達やその保護者の方々などの参加者に対して子ども食堂に来ている時間を良いものにするための工夫を各々して、活動に参加する中でそこについて気付く事の出来る有意義なボランティア活動ができたと思う。その中で利用者さんから詳しい話を聞くことはなかなか出来なかったが、保護者同士での会話や、ボランティアの方、お子さんとの会話を軽く聞く限り、この子ども食堂でしかなかなかちゃんとご飯を食べられないというようなイメージのある利用者の方はあまりいると思えなかった。もちろんそう

いう理由で参加されている方もいるとは思いますが、分母数に対して圧倒的に少ないように思われる。では一体子ども食堂を利用している人たちは何を理由に子ども食堂を利用しているのか考えてみた。

#### 自分の考え

私の予想として、利用者の方々が求めていることは、金銭的なものより、人とのつながりなのではないかと思った。しかし、ここで一つの疑問が生まれる。日本人がかつて当たり前のように行なっていたご近所付き合いは、時代の流れとともに消えていったものである。つまり、日本人はご近所付き合いという一つのつながりを、自ら手放したという事が出来る。自ら手放したつながりというものを、日本人はなぜまた求めているのだろうか。

ご近所付き合いが面倒と言われ、そのつながりを日本人が手放した理由について自分なりに仮説を立ててみる事にした。昔のご近所付き合いというものを自分なりに想像してみたところ、思えがかれるものとして、お隣さんに作りすぎた晩御飯のお裾分けをしたり、道端で会った時に長話や井戸端会議が始まったりする結果、町の中で何かがあるとすぐに町中に広まっていく事であったり、鍵がかかってない家同士で、勝手に上ることが当たり前になっているようなものが思えがかれた。つまり、人とのつながりが厚い分、自分自身のプライバシーというものがあつてない様なものになるのでは無いかと考えられた。このイメージが高いのであるなら、日本人が手放したかったものは、人とのつながりなのでは無く、プライバシーの守れないような環境を捨てたいと思うような人達が増えていったのではないかという仮説も立てられる。だがやはり人とのつながりが強いとプライバシーを守るのは難しく、極端な話、プライバシーを守る為に人とのつながりが希薄化していき、捨てることとなったのではないかと思えた。わざわざ捨てたいと思っていたわけではないが、他に得たいものを優先する為に捨てるを得なかった為に捨ててしまった。だから今になってまた求め始めたのではないか。

実際問題、何故ご近所付き合いが希薄化してしまったのかという問題については分からないが、NHKの監修している、解説委員室というニュースなどを専門的な視点で分かりやすく説明してくれるホームページによると、社会意識に関する世論調査において、ご近所とよく付き合っていると答えているのは17.9%しかいないとあったが、どの程度で地域での付き合いが望ましいかという質問に関しては、住民全ての間で困った時にお互い助け合うと答えていた人が全体の46.3%と、半数近くを占めていたという。このように、日本人はつながりを求めているにもかかわらず、つながりを持つ事が出来ていないような状態なのである。解説委員室では、その解決法のある一例として、隣人祭りというイベントについて取り上げていた。フランスのパリからできたもので、同じマンションの住人や近所の人に、「飲み物や食べ物を持ち寄っておしゃべりしよう」という声が上がった事が始まりで、2008年から日本でも行われるようになったらしい。町内会のイベントや、自治会でのイベントだと、事前準備などが大変である一方、これらなら大きな準備などもいらないため開催するのに気楽であり、参加もとてもしやすいとの事だ。であるなら、子ども食堂はどうなのだろうか。子ども食堂は、それに参加する側の人たちが何か特に何か事前準備をしなければいけないわけでは無く、準備してくれている子ども食堂側に、少額の料金さえ払えば利用する事が出来、尚且つ月に一度のペースで行われている。そこに参加する人たちは大概子どもが多いが、

その保護者さんも集まることから大人同士のつながりというものも出来たり、高齢者の方が来たりすることもあるので、多世代間交流を行うことも、自分に近い世代の人を探してそのつながりを作ることも可能であると思われる。

僕がこのレポートの中で挙げた仮説として、個人のプライバシーをしっかり守りたいがつながりは欲しいという人が今の世代では多いのではないかというものがあり、それを裏付けするような文献などを見つけることは出来なかったが、それを軸に考えてみたとしても、子ども食堂でのつながりは、お互いが絶対に顔を合わせる機会はその子ども食堂の場のみであり、頻度としては月一ペースのところが多いが、そこも自由参加であるため、たくさん行きたいと思うなら全日程参加すれば良いし、予約などを取らないところであるなら当日の気分によって決めることも可能である。そう考えると、子ども食堂で作られるつながりというのは、距離感が近すぎず、プライバシーを守れないようなものでなく、さらにその中で自分の参加頻度や、個々とのつながり方によって微調整を行うことが出来るものなので無いかと考えられる。もし僕の仮説がある程度的を得ていて、そのくらいの関係性というものを探している人が多い場合、子ども食堂の利用者が増え、需要が増える分最近子ども食堂自体も多くなってきている事にも納得出来るし、これからもこの子ども食堂もいうものは増え続けていくのではないかと考えられる。

終わりに

以上のことを踏まえて、子ども食堂が持つ潜在的な可能性としては、今の日本がもう一度求め出している、手軽な人と人とのつながり、また、あくまで仮説としてはあるが、ある程度の距離感を保ちながら続けられるつながりの形として、最も適した場所を提供する事の出来る可能性があるのではないか。